Copy Right 東京都公文書館

享保四年正月二十二日先に仰をうけて赤坂溜池の普請をつとむるのところ、六月二十三日有徳院殿（吉宗。徳川）駒場所より還御のとき、その地に成せたまひ懇の仰をかうぶり、家臣等も拝謁す。八月二十八日その事成により、時服二十領を賜ひ、家臣等にも物をたまふ。

――寛政重修諸家譜

廿三日丙申（享保四年〔紀元二三七九年〕正月○丙申、三正綜覧。）武家防火ノ制ヲ示達ス。（柳営日次記。享保四録。）

武家防火制　左ノ示達有リ。

廿三日（享保四年正月中略。）

一、大久保佐渡守（常春。）御目付御使番ヲ被仰聞ル趣、

一、大名衆屋敷近所出火之節、人数被出ル義、屋敷廻り二三町と被仰出ルゝ、小火之内駈付もゑ出ル処をもとめしル積りニゐル。夫故人数小勢之分ゝ不苦ル。早く駈付ル様と相達ル様ニ、屋敷廻り二三町之外迄も人数被出ル程遠く人数被出ル内ニゝ火幅も廣く成、無詮事ニル間、彌屋敷廻り二三町を限り、火事ひろゐらさる内かけつけル様ニ、能々可被申通ル事。

但、出火之場所ニより、近所ゟ人数被出ル程之屋敷無之處ゝ、少し程遠く共、人数被出可然事。

一、小身衆ゝ、近所出火之節、火事装束も不被致平服ニゐ見廻りル様ニ可申合ル。此儀も爲心得可被申通ル。

殿昌期

PermLink https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/idata/100/1041.36/1/L-19/00363.tif
Copyright © 1997 - Historiographical Institute The University of Tokyo © 東京大学